
ボッチのラブ作戦！

澄田 康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボツチのラブ作戦！

【Nコード】

N74470

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

いつまで経っても振り向いてくれない浮世に、ダイダラボツチはある策を思いついた。その策とは？*この話は、導かれし者が幻想入りの外伝短編です。ただし、本編とは一切関係ありません。

（前書き）

前書き

どうも、導かれし者が幻想入りの作者、澄田康美です。

今回の短編は、導かれし者が幻想入りに出てくるキャラクター、

ダイダラボッチを一応の主役とした話です。

なぜこれを書き下ろしたかと言いますと、

本編の方のユニークが3000、PVが15000とそれなりの数字になった為、

記念としてやってみた話です。

いたらぬ所も多いでしょうが、お楽しみくださいませ。

ではどうぞ。

妖怪の山のある場所。

ここは男子禁制の場所であるらしい。

そこでダイダラボッチは、幻想の境界、八雲 紫と話を交わしていた。

二人はそれなりに付き合いが長いらしく、会話も慣れ親しんだ様子である。

「ねえ、紫」

どうしたら、浮世って私に振り向いてくれると思うっ?。」

子供のようにただをこねた様子のダイダラボッチに、

紫は面白半分の調子で相談に乗っていた。

「そうねえ、彼は人間で、あなたは妖怪

これが壁になってるのかもしれないわねえ」

「ええ!?!それだったら私、どうすればいいのよ・・・。」

しゅんとしおれるダイダラボッチに、紫は友人として放って置く事は出来なかった。

紫落ち込むダイダラボッチの肩をポンと叩き、ある提案を持ちかけたのだ。

「そんなに困ってるのなら、私がちょっとセッティングしてあげようかしら？」

「本当！？じゃあ、頼めるかしら！？」

「ええ、私一人じゃちょっと難しそうだから、ちよつと手伝ってくれそうな奴を呼ぶけど、それはいいわね？」

「もちろん！！」

ダイダラボッチが快諾した後で、紫が話を進めてきた。

「じゃあ、内容について話してあげるわね——」

紫の立てた作戦の全容とはこうである。

まずはダイダラボッチ自身が浮世を誘い出し、とある場所に向かう。

しかしその道中にて、悪者役の紫の友人が登場。

ダイダラボッチがそこで助けを懇願し、浮世がそれを倒していく。

最後の敵役を倒した所で、ダイダラボッチが浮世に。。。して、一件
落着！！

・・・というあまりにもお粗末極まりない内容である。

しかし、ダイダラボッチ一人ではまあ何も出来ない訳だから、

こんな無策に等しい策でもやる意味はあるのかもしれない。

紫の話が終わった後で、ダイダラボッチは早速準備に取り掛かった。

「遅いな・・・ボツチの奴・・・」

浮世はダイダラボッチに言われた場所にて、ダイダラボッチが来るのを待っていた。

この様子を見る限りでは、

時間は守ったがダイダラボッチはまだ来ていない……という様子である。

それなりに待たされた浮世の前に、ダイダラボッチが手を振りながら浮世の元に来た。

「浮世」待たせてごめんね
ちよつと準備に手間取っちゃって」

「準備って、何の？」

「あ！ーい、いやいや、何でもないよ何でもない……」

あわや口が滑りそうになったダイダラボッチ。

その様子を浮世は一瞬だけおかしいと思ったが、詮索する事はしなかった。

「で、今日は確か……悪さをしている厄介な妖怪のいる所に行くんだよね？」

「そうそう
だからぬっちゃんやかあくんは今日つれて来れないのよ」

「まあ、あの子達は二人とも子供だからな
危ない目にあわせる訳にはいかないだろう」

浮世のそんな心配りにも、ダイダラボッチはときめいていた。

「（はわあゝ・・・やっぱり浮世って優しいなあゝ・・・）」

ぼけーっとなって浮世を見るダイダラボッチに、さすがの浮世も変に思った。

「・・・ボッチ？」

ダイダラボッチの目の前で、手をひらひらとさせて、ダイダラボッチの意識の確認をした。

「はわわー!!」

浮世の行動に対し、ダイダラボッチは目を覚ましたかのような様子になった。

どうやら彼女、完全に意識を飛ばしていたようである。

これには浮世も呆れ気味になったが、これもまたダイダラボッチらしいと判断した。

「・・・とりあえず、その場所に早く向かうとしよう」

「うん!!」

なぜか浮世が先導する形で、二人は目的の場所へと歩いていった。

どこかの山の山腹。

少しおどろおどろとしたこの山に、二人は足を取られそうになりながら、

どうにか山を登っていった。

浮世の前を歩くダイダラボッチの足並みがおぼつかない様子に、

浮世は心配する声を出した。

「ボッチ、足元に注意してくれよ」

「わかってるってば」

こんな所でこけるほど――」

と言ったそばから、ダイダラボッチは派手に転び、倒れそうになった。

「はわわわわわわ!!」

ダイダラボッチが慌て調子で後ろに倒れそうになった時、

浮世が寸でのところでダイダラボッチを受け止めたのだ。

「大丈夫か、ボッチ？」

お姫様だっこをした状態のダイダラボッチに語りかける浮世。

「う、浮世が受け止めてくれたから、だ、大丈夫だよ・・・」

声色や調子から察するに、ダイダラボッチは完全に舞い上がりそうになっていた。

「（はわわ・・・これって神様の配慮？それとも偶然？

どっちにしても、もう少しこのままがいいかな・・・）」

切に願うダイダラボッチだが、こんな足場の悪い場所で、

ダイダラボッチを担いだまま歩ける訳がない。

浮世の答えは、正直なものであった。

「そうか、それだったら、降ろすぞ」

「え？う、うん・・・」

ダイダラボッチは浮世の手元を離れ、立ち上がった。

もちろん、ダイダラボッチは相当にテンションを落とした。

「（うう・・・まあ仕方ないよね・・・こんな危ない道じゃしょうがないよね・・・）」

悲しみにくれるダイダラボッチに、

浮世はそつと、ダイダラボッチの手を握ってきたのだ。

「——へ？」

当然戸惑ダイダラボッチに、浮世は照れた様子で説明してきた。

「こ、こんな所じゃ危ないから、俺が手を握ってやるよ・・・」

「浮世・・・」

浮世の優しさを前に、ダイダラボッチのブレーキはもう限界だった。

そしてダイダラボッチは——とうとう行動を起こしたのだ。

「——どうせだったら、こうじゃないと嫌」

ダイダラボッチがそう言うが早いか、

自分の腕を浮世の腕にしっかりと抱きつかせてきたのだ。

「ちょ！？何のつもりだボツチィ！？」

「だってえ、手を握ってるぐらいじゃ、こけた時危ないんだもの」

「いやいや！！どっちにしてもだな・・・」

と浮世が言おうとしたが、ダイドラボッチが寂しそうな顔をさせて、まるで捨てられた子犬のように浮世を見つめてきたのだ。

「・・・やっぱり、浮世は嫌なの？」

これには、さすがの浮世も参るしかない。

「い、いや・・・嫌な訳ないけど・・・」

「じゃあ、いいよね」

「・・・わかった」

浮世の降参によって、二人はそのままの形で山道を登って行く・・・はずだった。

足場の悪い所を抜けた矢先に――紫が配置した二人の悪者
役が出てきたのだ。

「げへへへへー！！ここは通さないぞおー！！」

「この先には、あたし達のボスがいるからなあー！！」

すごいノリノリな調子のこの二人。

サングラスをつけてはいたが、どこをどう見ても萃香と勇儀の二人であつた。

もちろん、浮世にとっては想定していなかった事なので、

浮世は即座に腕組みを解いて、戦闘態勢に入ろうとした。

「くー！！やっぱりこんな奴がいたかー！！

ボッチー！！ここは協力して敵を――」

と浮世がダイダラボッチに言おうとしたが――浮世は言葉を失ってしまった。

浮世が見た先にいたのは、ダイダラボッチではない――

怒髪天を突く、阿修羅の姿であつた。

「—— やつといい雰囲気になれたのに……」

怒りをあらわにするダイダラボッチに、待ち構える二人は汗をだらだらと流していた。

なぜなら、ダイダラボッチの背後から——

巨大な手が二人の方に向いており、今にもそれが二人に襲いかかるうとしていたからだ。

「ちょ！？話と違くないかな!？」

「あ、あたし達が聞いてた話だったら、ここはそっちの人間が——
——」

二人の言葉は、巨大な手の中に潰される形で埋もれていった。

凄まじい轟音が周囲になりひびき、山の地形がちよつと変わった後で、

ダイダラボッチは再び笑顔になって、浮世に駆け寄った。

「それじゃ、行こっか」

「ああ・・・」

すごく自然に腕を組んできたダイダラボッチに、浮世は拒む権利などなかった。

その後も、紫の立てた作戦のことごとくを、ダイダラボッチが潰していった。

愛と怒りの前に、ダイダラボッチは当初の目的の事なぞ完全に忘れ、とにかく迫り来る敵を全て叩き潰し、^{みかた}浮世は隣でひきつった顔になつて、

二人はとうとう——山の頂上についたのだ。

山の頂上にいたのは、言葉を失うのを通り越して、もはや呆れるしかない紫がいた。

自分がせっかく立てた作戦を、感情に任せて全て潰してしまった友人に、

どうすればいいのかと考えつくしたのだが、どうしようもないと紫は判断したのだ。

一応作戦の通り、紫は厄介な妖怪の役を演じた。

「ふっふっふ、よくぞここまでたどり着いたわね!!」

その褒美として、お前達二人の仲を引き裂いてあげるわ!!」

さて、ここまで完全に台本を無視したダイダラボッチであるが、

当然最後もその台本を無視しようとした。

「私の恋路を邪魔する奴は——」

と言おうとしたが、浮世がダイダラボッチの手から離れ、

紫の前に立った。

「う、浮世！？ここは『いい加減に、俺にも活躍させてくれよ』」

ダイダラボッチの声を遮るように、浮世が言ってきたのだ。

「ここに来るまで、ずっとボッチが敵と戦ってきたんだ
だったら、最後ぐらいは俺に格好つけさせてくれよ」

浮世の決めた調子の顔と声に、ダイダラボッチはそれ以上何も言えなかった。

そして浮世は紫の前に立ち、構えた。

「さて――お前は素直に話を聞いてくれる妖怪じゃないよな
？」

「もちろん

ただし、お前が私に勝てば、お前の言う事を聞いてもいいぞ？」

「そうか――だったら」

浮世は覚悟を決めて――紫に宣誓した。

「――俺がお前を倒してやる!!」

「上等だ!! かって来い!! 人間よ!!」

長い激闘の末、二人の戦いは――浮世の勝利で一応終わった。

もちろん、紫は手加減していたのだが、ここは負けなければ話が進まない以上、

まだまだ弱い浮世相手でも、負けなければならなかったのだ。

それでも、それなりにぼろぼろになり、つかれきった様子の両者。

とりあえず、浮世は当初の目的を果たそうとした。

「そ、それじゃ・・・もう悪さするんじゃないぞ・・・」

ぜいぜいと言う浮世に、紫も一応疲れたふりをして、浮世の要求に応じた。

「わ、わかったわ・・・
もう悪い事はしないよ・・・」

「わかったなら・・・それでいい・・・」

浮世がそう言った後で、紫はあまりにもナチュラルに、隙間からその場を去っていった。

戦いが終わったと思った浮世は、どうにか立たせていた体をその場に座らせた。

「はぁあゝ・・・すっげえ疲れた・・・」

そんな様子の浮世に、ずっと見ていたダイダラボッチが駆け寄ってきた。

「浮世!!」

「ボッチか・・・どうだ？俺・・・少しは頑張ってたか？」

「うん!!浮世、すっごく格好よかったよ!!」

「そうか・・・それなら少しは・・・男の面子つてのも・・・保てるな・・・」

疲れきった様子の浮世に――ダイダラボッチがある提案を出してきた。

「う、浮世・・・どうせだったら・・・膝枕してあげるよ」

「それは・・・ありがたいな・・・頼むよ・・・」

「うん!!」

ダイダラボッチは嬉々として座り込み、浮世の頭を自分の膝の上に持ってきた。

「ボッチの膝枕・・・悪くないな・・・」

「そ、そう?」

「ああ・・・このまま寝てしまいそうなくらいだ・・・」

「さ、さすがにこんな所で寝るのはちょっと・・・」

「はは・・・そりゃ冗談に・・・きま・・・」

言おうとした浮世の眼は、ゆっくりと閉じてしまった。

その後にしてきた寝息に、ダイダラボッチはどうしようかと思ったが、

とりあえず、そのままにいる事にした。

その内目を覚ますだろうと考えて、ダイダラボッチは浮世の枕でい続けたのであった。

「やれやれ、こんな事になるだなんて、予想外すぎたわね」

「協力してくれた皆には悪い事をしたな
後で謝っておくよ、紫」

「別にいいわよ」

ボッチが自分からやっちゃったんだし、あなたは悪くないわよ」

「いや、この作戦は俺が考案したんだから、俺にも責任はあるよ」

「ふふふふ、まさかこの作戦を考案したのが、あなただなんて思
わないわよねえ？」

「ボッチの事だ

気づいてはいないだろう」

「とりあえず、作戦は成功って事でいいのね？」

「もちろんだ」

「それじゃ、また機会があったら、呼んでくれたらいいわ
さようなら」

「ああ、ありがとう」

ボツ
チのラブ
作戦
F
I
N

（後書き）

後書き

どうでしたか？本編は完全に無視している為、すごい自由にやりました。

本編で二人の関係がどうなるかは、まあ今後の展開次第です。

これからも、とりあえず導かれし者が幻想入りを、よろしく願いますね（＾―＾）

スペシャルサンクス

ダイダラボッチ 様

八雲 紫 様

人橋 浮世 様

星熊 勇儀 様

伊吹 萃香 様

名もなき妖怪や鬼達

では、このような粗末な駄文をお読みいただき、

真にありがとうございました（*^|^*）

b y 澄田 康美

P S ボツチの口癖、はわにしてみようかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7447o/>

ボッチのラブ作戦！

2010年11月6日16時30分発行